

P1-032

「気になる子ども」を含む発達障がい児の母親が外来受診時に感じる困難感 — 母親の受診時の思いに対するインタビューの検討から —

田中 美樹¹、横尾 美智子²、青野 広子¹、
宮城 由美子³

¹福岡県立大学 看護学部小児看護学領域、

²西九州大学、

³福岡大学 医学部看護学科

【目的】

発達障がい児を含む気になる子どもが、病気に罹患し医療機関を受診した際、その特徴により受診を断られたり、必要な処置を受けられなかったりなど、受診時の困難さが報告されている。外来は子どもにとって初めての医療機関で、そこでの経験が今後の医療体験に影響を及ぼすことが考えられる。そこで、気になる子どもを含む発達障がい児が安心して当たり前前の医療を受けるために、母親からみた外来受診における困難場面を明らかにし、支援のあり方を検討することを目的とした。

【方法】

研究対象者：発達障がいと診断または、発達障がい疑われる子どもの母親7名

データ収集方法：外来受診時の経験や思いについて半構成的グループ面接を行った。

分析：インタビュー内容は許可を得て録音し逐語録を作成し、意味内容の類似性によりカテゴリー化した。

倫理的配慮：A大学研究倫理委員会の承認を得て行い、研究協力者に対しては研究の趣旨等を口頭と文書で説明し同意を得た。

【結果】

分析の結果、受診時に母親が感じる困難感として6つのカテゴリー（以下、〈〉で示す）が抽出された。母親は、受診中に〈子どもの特性〉に対する〈他の保護者の視線や反応〉や〈外来スタッフの対応〉に〈親子の居場所がない〉と感じており、その原因として〈待ち時間の長さ〉や〈慣れない/初めての環境〉が影響していた。また、母親が困難感を感じた際、外来スタッフに求める支援について、〈子どもの特性の理解〉、〈見通しを立てる〉、〈困っているときの声かけ〉、〈配慮の申し出をしやすい環境調整〉の4つのカテゴリーが抽出された。

【考察】

外来受診時、母親は子どもの特性や待ち時間の長さだけでなく、周囲の視線や反応および外来スタッフの対応により、待合室で孤独感が増し、そのことが母親の医療機関に期待できない思いを抱かせていることが分かった。また、外来のスタッフは子どもに対する専門知識をもとに、子どもの個性や特性にあった関わり方や、母親が困っている状況に早期に気づき、支援できる環境づくりを行う必要性が示唆された。本研究は平成26年度科学研究費助成事業(基盤研究C)26463426の助成を受けた研究の一部である。

P1-033

「気になる子ども」を含む発達障がい児の外来受診時にスタッフが感じる困難感 — 外来スタッフのアンケート調査より —

宮城 由美子¹、田中 美樹²、横尾 美智代³、
青野 広子²

¹福岡大学 医学部看護学科、

²福岡県立大学 看護学部、

³西九州大学 健康栄養学部健康栄養学科

【目的】

発達障がい児を含む気になる子どもが、病気に罹患し医療機関を受診した際、その特徴により受診を断られたり、必要な処置を受けられなかったりなど、受診時の困難さが報告されている。外来は子どもにとって初めての医療機関で、そこでの経験が今後の医療体験に影響を及ぼすことが考えられる。そこで、気になる子どもを含む発達障がい児が安心して当たり前前の医療を受けるために、外来スタッフが経験している困難場面、困難事項を明らかにし、支援のあり方を検討することを目的とした。

【方法】

研究対象者：A県の小児科・耳鼻科・眼科・皮膚科を標榜とする医院(クリニック)に勤務するスタッフ。調査内容：発達障がいの特性に関する認知、気になる子どもを含む発達障がい児の受診経験の有無と外来における困難事項とした。分析：量的データに対しては記述統計、自由記載欄に記載された内容に対して類似する内容毎に分類した。倫理的配慮：A大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

有効回答は922名(61%)であった。対象者の属性は小児科勤務295名(32%)、眼科220名(23.9%)であった。職種は看護師432名(46.9%)、事務職員242名(26.2%)、医師180名(19.5%)であった。現在の平均勤務年数は17.2±10.9であった。発達障害を含む気になる子どもの受診経験は735名(79.7%)が経験していた。困難場面と困難事項としては、場面に共通する事項は〈多動〉〈大声・奇声を出す〉が最も多かった。共通項目以外で各場面での困難事項は、受付時及び会計時では〈多動による院外への飛び出し〉〈多動により母親が受付、会計ができない〉、待合室での〈多動・大声・奇声により他の患者からの苦情〉〈他の子どもとのトラブル〉、問診時の〈計測、測定ができない〉〈母親が情報を伝えない〉、検査時の〈暴れる〉〈怖がる〉診察時の〈病変部が見れない〉〈嫌がる〉などが見受けられた。

【考察】

外来受診時、疾患の特徴からみられる症状も、外来における場面では困難感が異なり、そのため対応が十分にできていないことが考えられる。また診療科の特徴により、検査・診察などが異なるため母親の外来受診時における安心感を持たせることで、医療者と家族からの適切な情報共有ができよりスムーズな外来受診ができると考えられる。本研究は平成26-28年度科学研究費助成事業(基盤研究C)26463426の助成を受けた研究の一部である。